第７１回　中部日本高等学校演劇大会　**生徒講評委員会講評文**

泊高校

「扉はひらく」

２０１８．１２．２５　上演５

クラスメートに無理に話を合わせ、ひとりぼっちにならないように努めるオオタと、ひとりぼっちでいることになれてしまったマイワ。ふたりはそれぞれ違う用事でショッピングモールを訪れ、偶然にもふたりが乗り合わせたエレベーターが緊急停止してしまう。閉じ込められてしまったふたりは、自分たちの話を打ち明けていくうち、次第にクラスでの立場を超えた友情を育んでいく。

キャストをオオタとマイワのふたりだけにすることで、彼女たちの仕草や表情、心情の変化に注目を集めることが出来ていた。特にクラス内でオオタが苦しそうな笑顔や笑い声を上げながら弁当を食べるシーンでは、オオタが自分の居場所をクラスの中に見つけ出せていない様子がはっきり伝わってきた。また、エレベーターが開く瞬間にマイワは喜びを感じ笑顔になっているが、オオタはうつむいていることから、やっと見つけた自分が素直でいられる場所がなくなる悲しみを感じていることがわかる。ふたりの異なる心情が、役者の表情により無言のうちに伝わり、切なさを覚えた。

照明は、エレベーターの閉塞感を表現するのに効果的だった。一方で、エレベーターから出たときに出来る光の広がりは、広い空間に場面が変わったことを上手く表現できていた。舞台装置はひき割り幕の外に椅子をふたつしか設置しないことで、クラス内での彼女たちの居場所がたったこれだけしかないということを見事に表現していた。また、エレベーターの内部を舞台装置で表現しなかったことは、前述のエレベーターから出た時の空間の広がりを邪魔しないことにおいて効果的だった。音響は、エレベーターが開くときのアナウンスを３回繰り返すことで、マイワとオオタの気持ちの膨らみを表現するのに効果的だった。また、ラストシーンに流れるＢＧＭは、オオタの宙ぶらりんになってしまった精神状態をストレートに表現することが出来ていた。

劇のラストで、オオタはあんなに仲良くしていたマイワに挨拶を返すことが出来ず、人間関係を変えることができなかった。これについては、周囲の人の目を気にしてしまって返すことができないのもしょうがないとする意見や、客観的には応えたいと思うが、もし自分がその立場だったらできないかもしれないという意見があった。

ひとりぼっちになりたくない、本当の自分を分かってほしいという思いがある中で、それを打ち明けられない高校生の未熟さ、複雑な心情が描かれており「本当の友情」とはなにかということを深く考えさせられる劇だった。